

お名前	性別	終戦時の年齢	現住所
伊藤喜代子	女性	21歳	新城市日吉 (新城市海老)

「親切な満人のおかげで」

「東三河郷開拓団からの手紙」より

(部分修正)

私は昭和15年、旧女学校の3年生の時、一家を挙げて東三河分村計画に基づいて入植しました。私は16歳、開拓団本部へ勤め、いろいろと開拓建設における大人たちの苦勞を見聞きしてきました。思いもかけぬ終戦を外地で迎え、その後の苦難は皆様からのお手紙で分かっていたことと思います。

東三河郷開拓団の団長さんで、田口出身の関谷城三さんは、本当に誠実で温厚な立派な団長さんでした。帰国までの苦難の月日も、関谷さんがあったればこそで、私どもも無事に帰国することができました。



当時の入植者家族 東三河郷開拓アルバムより

昭和21年の正月を過ぎ、お金や食糧がなくなり、やむなく散り散りに生きる道を求めながら最果ての荒野をさまよい歩くようになってしまいました。私ども一家も、21年2月頃に熊本県出身の東陽開拓団を出て、いったんは滝川辰雄さんたちと25、6名で、元いた三合屯へ戻りました。そこでは心配していたとおり、匪賊に出会い、それはそれは恐ろしい思いをしました。

そこで6里(24km)ぐらい東南にある、東陽鎮という町の城外にある満人の部落に身を寄せました。団の皆さんの多くは、次々とチチハルへ向けて南下しました。私どもは父60歳、養子の靖20歳、私21歳の3人でしたが、他に75歳ぐらいのおばあさんと5人の子供を連れた出征兵士の家族と一緒にいたので、チチハルへの36里(約140km)の道を歩いては行けません。暖かくなるのを待つことにし、働ける者は子供まで働いて、寝る所と食べ物をもらって何とか命をつなぎました。この時が一番苦難の時でした。団の人たちといっしょの時は何ととっても心強かったけれど、10名中8名までが発疹チフスにかかり、その時一緒にいたおばあさんは亡くなりました。父と12歳の男の子と私と3人で、おばあさんの亡骸を少し離れた野原へ埋めました。6月になり、さすがの北満も暖かく皆元気になってきました。この頃から、また治安が乱れてきて、もうたまたまらず南下を決意しました。

チチハルには日本人会ができていて、難民収容所なんみんしゆうようもあちこちに多くあるから、チチハルまで出れば大丈夫だいじょうふと親切な満人が知らせてくれました。

布団まい1枚あるでなし、着の身着のままで食べ物もない、お金も1銭もない、塩を入れただけの粟あわのおかゆをすすっていたのでは、また寒くなればどうなるでしょう。二度目の冬を越すことはとてもできない。道中、どのようなことがあるかは分らないけれど、いっしょにチチハルへと南下すなを勧めました。他の1家族の方は、東陽鎮には滝川さんや満人さいこんと再婚した人たちが数人いたので、一家族でもいいからここに残りますと断られました。

仕方なく三人で夜逃よにげしました。道に難儀なんぎもしましたが、何とかチチハルまでたどり着きました。同胞の方々と再会することができ、1ヶ月後に帰国きこくの途につき、40日間かかって故国の土ふを踏むことができました。

終戦を聞いて最後と覚悟せと 冷たく涙の頬をつたいて
屈辱を受けてならずと母ともに 死出じゅぼんの襦袢えりに白き衿さず
ソ連兵 土足で家を踏み荒らし 金品奪って今日もゆきたる
坊主刈り 互いに見合って笑へども 乙女心の恥ずかし悲し
明けやらぬ こうりゃん畑をのがれ来て 遠くにロバの鳴く声ぞ聞き
冬近し 八路の軍の被服縫う 今ひと時の糧を求めて
故国ふるさとを間近にしたる玄界に 友なきがらの亡骸 波に消えゆく

平成2年11月
(記録者 広瀬 尚子さん)